

外部評価委員会
評価報告書
(平成26年度・中間評価)

平成27年5月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)

まえがき

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所は、東京都における高齢者医療・老年学・老年医学の研究拠点として、病院部門と連携し、トランスレーショナルリサーチの推進を図るとともに、老化関連遺伝子の探索や老化抑制化合物の同定及びその機序の解明に関する研究、病院の重点医療（血管病・高齢者がん・認知症）や高齢者特有の疾患に関する研究、高齢者の社会参加や生活支援に関する研究を行い、高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究を推進しています。平成26年度は、第2期中期目標・中期計画（平成25年度～29年度の5か年計画）の第2年度にあたります。

研究所は、自然科学系と社会科学系の2系に分かれております。自然科学系は、6チーム、16テーマで構成され、社会科学系は、3チーム8テーマで構成されています。また、社会科学系では、東日本大震災被災者支援研究及び4つの長期縦断研究にも取り組んでいます。

評価は、各研究テーマ、東日本大震災被災者支援研究及び4つの長期縦断研究については、平成26年度の研究成果と計画の実現可能性の視点から、研究チームについては、チームの総合力の視点から、外部評価委員による評価（中間）をお願いしました。

委員の皆様方には、大変ご多忙な中、研究所の今後のために貴重な御意見や御助言を賜り、心より感謝申し上げます。いただきました御意見や御助言を踏まえ、自己改革の努力を一層積み上げ、第2期中期目標・中期計画の達成を目指して今後も研究を進めていく所存です。

都民の皆様、御関係の皆様には、今後とも当研究所の活動に御指導、御鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
（東京都健康長寿医療センター研究所）
センター長 許 俊鋭

目 次

- 1 自然科学系研究外部評価委員会 1 頁
- 2 社会科学系研究外部評価委員会 1 5 頁
- 3 外部評価委員会設置要綱 2 7 頁
- 4 外部評価委員会実施要綱 2 9 頁

自然科学系研究外部評価委員会

1 評価対象研究テーマ (チーム)

研究チーム	研究テーマ
1 老化機構	1-1 分子機構
	1-2 老化バイオマーカー
	1-3 プロテオーム
2 老化制御	2-1 健康長寿ゲノム探索
	2-2 分子老化制御
	2-3 生体環境応答
3 老化脳神経科学	3-1 自律神経機能
	3-2 記憶神経科学
	3-3 神経生理
4 老年病態	4-1 血管医学
	4-2 生活習慣病
	4-3 運動器医学
5 老年病理学	5-1 高齢者がん
	5-2 神経病理学(高齢者ブレインバンク)
6 神経画像	6-1 脳機能
	6-2 PET画像診断

2 評価方法

評価にあたっては、テーマについては平成26年度の研究成果、研究計画の実現の可能性及び総合評価を、チームについては総合力の視点から、5段階（5点満点）により評価を行った。

この総合評価点により、以下のように、AからDの4段階に評価を区分した。

総合評価点	評価区分
4.4点以上 5点以下	A (特に優れている)
3.2点以上 4.4点未満	B (優れている)
2.0点以上 3.2点未満	C (普通)
2.0点未満	D (劣っている)

3 評価委員

別添「自然科学系研究外部評価委員会委員名簿」のとおり

4 委員会実施日

平成27年3月6日(金) 午後1時00分～

自然科学系研究外部評価委員会 委員名簿

区 分	氏 名	所属・役職名
学識経験者	しもかど けんたろう 下門 顕太郎	(老年医学・循環器・血管生物・代謝) 東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科血流制御 内科学分野教授
	よこて こうたろう 横手 幸太郎	(糖尿病代謝内分泌・老年病分野) 千葉大学大学院医学研究院 教授
	あきした まさひろ 秋下 雅弘	(老年病学) 東京大学大学院医学系研究科 教授
	ひぐち けいいち 樋口 京一	(加齢病理学、病態遺伝学) 信州大学大学院医学研究科 教授
	あいがき としろう 相垣 敏郎	(老化と寿命・分子生物学・ゲノム科学) 首都大学東京大学院 教授
	みむら まさる 三村 将	(神経心理学・老年精神医学) 慶応大学医学部精神神経科学 教授
都民代表	すぎもり じゅん 杉森 純	(報道関係) 読売新聞医療部
行政関係者	むらた ゆか 村田 由佳	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

1 老化機構研究チーム

○ 研究テーマ別評価

1-1 分子機構

【研究の目的】

- APP代謝と糖鎖を解明し、アルツハイマー病の新たな治療及び予防法の開発を目指す。
- Klotho マウスを用いて、老化関連疾患の分子機構の解明を目指す。
- O-マンノース型糖鎖の合成機構や生理機能を明らかにし、筋疾患や加齢に伴う神経異常・筋萎縮の病態解明を目指す。

評 価

B

【評価内容】

- ・認知症、老化、筋の機能維持にかかわる糖鎖の変化や、病態への関与を明らかにした点は、学問的に評価できる。
- ・APPの糖鎖修飾とAPP代謝の関連性に関する成果は、現段階ではまだ十分な検証が行われているとは言えない。しかし、将来的に重要な知見になりうる。
- ・O-マンノース型糖鎖という特徴的かつ優位な研究キーワードの基に、各研究者の有機的な連携が進めば、さらに大きな進捗が期待できる。
- ・糖鎖を変動させると認められる因子は年々増え因果関係も明確になってきているが、最終的には糖鎖変化を制御できるようになることが治療法になると理解する。

1-2 老化バイオマーカー

【研究の目的】

- 認知症等の高齢者疾患の組織で発現変化を示すマイクロRNAを同定し、その役割を明らかにするとともに、体液中マイクロRNAの診断バイオマーカーの可能性を探索する。
- 疾患のモデル細胞から分泌される遺伝子・タンパクと膜小胞エクソソームに着目し、高齢者疾患の新規体液中診断マーカー及び治療標的の同定を目指す。

評 価

B

【評価内容】

- ・マイクロRNA、エクソソーム、分泌タンパク質に焦点を絞り、認知症や、間質性膀胱炎、前立腺がん、ミトコンドリア機能低下の体液中のバイオマーカーの探索と診断への応用を目指して着実に研究は進捗している。また、ミトコンドリア機能マーカーGDF15の高齢者コホートでの解析の進捗が期待できる。
- ・Clinical basedの研究なので、検査や治療法など臨床応用へ結びつくことが望ましい。その意味では総花的にならずより focus された project の検討が期待される。
- ・同分野での競争が厳しくなると予想されるので、独自の方法論やチームの特色となるものを確立していく必要がある。
- ・miRNA解析技術は珍しいものではなく、エクソソーム解析についても一般化されるのは時間の問題である。独自技術の開発も視野にいたった取り組みも期待したい。

1-3 プロテオーム	
<p>【研究の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大動脈中膜組織サンプルを用いてプロテオーム解析を行い、動脈老化の一つである動脈中膜変性症において変動するタンパク質及びその翻訳後修飾の解明を目指す。 ○ 糖尿病患者サンプル等を用いて、O-GlcNAc 関連酵素の変動解析や O-GlcNAc プロテオーム解析を行い、糖尿病及び関連合併症マーカーを探索する。 ○ 超百寿者血漿サンプルを用いてグライコプロテオミクスによる解析を行い、健康長寿マーカーとなるタンパク質あるいは糖鎖修飾を探索する。 	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動脈老化、糖尿病、超百寿者に関するプロテオーム解析を着実にやっている。特に、血管老化に関する新たな知見と O-GlcNAc 化ペプチドの濃縮法の開発、百寿者のシアル酸含有糖鎖の解析は注目すべき進捗である。反面、昨年同様であるが、動脈硬化（動脈解離）や糖尿病等の解析は検体数が少ないのが気にかかる。 ・研究成果をもう少し大きな数で解析できるシステムへの展開が望まれるのではないかと超百寿者の解析も興味深い、よく感じるの、結果なのか、体質的特徴なのか、区別が付きにくく、どのように一般の高齢者の健康長寿に結びつけて行くのか、今後の発展が可能か？判断が付き難い。 ・糖鎖修飾タンパク質を主要な解析ターゲットにすることにより、特色ある研究に発展するものと期待される。 	

○チームの総合力

<p>【評価の視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ チームとしての研究の実施体制・支援体制が適切に整備され、機能しているか ○ チームとしての研究活動の状況を検証し、問題点改善等の取組が行われているか。 <p>※以下、他のチームの視点も同様</p>	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム全体としてテーマの構成が整理されて最新の機器を用いた研究が戦略的に進められ、一定の成果を得ている。また、前期は基礎的研究の色彩が強かったが、臨床応用を視野に入れた研究計画になっている点は評価できる。今後、臨床応用の進展とともに、質の高い論文の発表が望まれる。 ・O-マンノース型糖鎖という共通の研究テーマが浸透している。また、最新鋭の解析機材を駆使して、マーカーの探索を推進するという、チーム全体としての共通基盤的な研究が進められている。他のチームへの研究支援や共同研究を介して、高齢者の健康増進の推進や高齢者疾患の病態解明や治療、予防法のための情報発信を期待する。 	

2 老化制御研究チーム

○ 研究テーマ別評価

2-1 健康長寿ゲノム探索	
<p>【研究の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ パーキンソン病・筋萎縮性側索硬化症・認知症の原因となる疾患群の原因を解明する。超百寿者の遺伝子多型を解明する。 ○ 老化に伴って起こる体力レベルや運動機能の低下を引き起こすメカニズムをゲノムレベルで解明し、遺伝情報を元にしたテーラーメイドの運動処方の開発を目指す。 ○ 線虫・マウスを用いて寿命の遺伝子解析に基づいた老化制御を追及する。 	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミトコンドリア病の治療と診断の同時開発はインパクトがある。広範な研究領域でそれぞれ成果を上げている。 ・成果も十分あがっており、テーマ内の連携もうまくいっている。新たな解析も着実に進行しており、遺伝子多型解析を基礎とした研究が研究所内外で有機的に結びついて行けば、さらに大きな成果があがると期待できる。ミトコンドリア病の新規治療薬の治験というトランスレーショナルリサーチの推進も特筆すべきである。 ・ミトコンドリア病の診断治療の研究は必ずしも高齢者に関係しないので、当研究所で行うべき研究かについての議論があるかもしれないが、本来目的としたこととは全く異なった重要な成果が得られるという基礎研究の性格から、順調に発展している本研究を対象年齢でネガティブに評価すべきでない。 	

2-2 分子老化制御	
<p>【研究の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 活性酸素が老化の原因であることを明らかにし、強力な抗酸化物質であるビタミンC等を用いて、活性酸素が関与する老化機構の解明と、食品からの抗酸化物質の摂取が老化制御に有効かを検証する。 ○ シトルリン化タンパク質やペプチジルアルギニンデアミナーゼを指標とした認知症等の早期臨床診断薬の開発を目指す。 	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・酸化ストレスに着目し、臨床的な視点から一貫して研究を進めており高く評価できる。 ・シトルリン化蛋白質の定量法は、認知症をはじめとした様々な老化疾患への応用や、研究へ発展すると期待できる。また、ダブルノックアウトマウスについては、成熟、高齢個体の解析が期待できる。 ・マウスモデルをどのように病態解明へ活かすか？ 	

2-3 生体環境応答

【研究の目的】

- 水素分子等の応用による新しい酸化ストレス防御法を開発し、効果的にミトコンドリア機能を維持・向上させる方法を探索する。
- C1k-1 トランスジェニックマウスを用い、寿命及び老化制御におけるミトコンドリア機能の関与を明らかにする。

評 価

B

【評価内容】

- ・水素水および重水素水の作用というユニークな研究を展開している。作用機序の解明を目指しているが、現時点での進展は乏しい。超解像度顕微鏡でのミトコンドリア観察は興味深い、適切な課題を設定する必要がある。
- ・水素水がイレッサによる副作用を抑制する、不妊患者の精子の運動機能を回復させるといった知見は有意であるが、老化制御にダイレクトに繋がるのかやや不明。
- ・水素水の作用メカニズムの検討か臨床応用か target を絞った方が良いのでは？
- ・他の研究テーマと比較して、テーマ内の連携の不足が感じられるので、この問題の充実が望まれる。
- ・水素水の効果は興味深い、その作用機序にせまる有効な戦略を見出せていない。研究テーマのゴールをより具体的なものに軌道修正することを検討されたい。

○チームの総合力

評 価

B

【評価内容】

- ・各テーマが相互に関連して発展させられる成果やプロジェクトが現れるとより望ましい。
- ・いずれのテーマも臨床応用を見据えたもので、チーム間の連携や競争という点で優れたチームである。
- ・チーム内の各研究テーマの関連性がやや希薄で、相互作用が十分でない印象をうける。材料やアプローチが違っていても、自由に議論できることが重要である。

3 老化脳神経科学研究チーム

○ 研究テーマ別評価

3-1 自律神経機能

【研究の目的】

- 高齢者の循環障害や排尿障害に関わる自律神経活動の制御法とその機序を解明する。
- 認知機能に重要なコリン作動系の加齢に伴う機能低下の予防・改善方法とその機序を解明する。

評 価

B

【評価内容】

- ・皮膚刺激効果が伝導速度の遅い皮膚神経を介していることなどの基礎的知見を得るとともに、排尿障害への応用など臨床応用も進展している。
- ・皮膚刺激が夜間排尿回数を減少させるなど、地道ながらユニークな知見が多く、原著論文が多いことから学術的評価が高いと思われる。また、外部機関や産業界からの関心・期待も高いと予想される。
- ・着実で特徴的な研究を実施していることが、雑誌、学会での評価として現れているようである。チーム内での連携は良好であると思われるが、テーマ内での連携や、他の研究テーマとの連携の強化が望まれる。

3-2 記憶神経科学

【研究の目的】

- 認知症等の高齢者疾患により障害を受ける記憶に着目して新たな視点から解析し、記憶改善治療に資する研究を目指す。
- 老化により大きな影響を受ける記憶に着目し、その細胞機構、分子機構を解析し、記憶改善治療に資する研究を目指す。
- 認知症の発症機構の解析と認知症の進行度を示すバイオマーカーを探索する。

評 価

B

【評価内容】

- ・ $A\beta$ により発現が誘導される遺伝子を検索し、その生物学的役割を検討し、バイオマーカーとなりうる分子を同定したことや、マウスの認知機能評価法を確立したことは重要な成果である。
- ・既存の薬剤であるシロスタゾールを用いた研究を行い、次のステップ（発展）は？
- ・シロスタゾールの研究は臨床に直結するが、メカニズムとしては簡単ではないようだ。
- ・シーズ育成の実現性が不明確。
- ・記憶改善に寄与する化合物については、臨床応用にむけて動物実験による解析が重要である。 $A\beta$ オリゴマーによって誘導される分子の機能に関する研究は興味深い。今後の展開が期待される。

3-3 神経生理

【研究の目的】

- 大脳基底核を中心とした大脳皮質 - 大脳基底核ループの機能異常は、パーキンソン病やハンチントン病、脳血管障害などの疾患において錐体外路症状や精神症状を来す。これらの病態を模したモデルマウスや、関連する分子の遺伝子改変マウスを用いて神経細胞膜に存在する神経伝達物質やイオンチャネルの変化がどのような回路異常を来すか、電気生理学的に明らかにする。

評 価

B

【評価内容】

- ・電気依存性 Na チャネル $\beta 4$ サブユニットの生理的機能を明らかにした研究は、高く評価できる。
- ・臨床応用への道すじがやや見えにくい。
- ・他の神経関連テーマの研究者との有機的な連携が肝要かと思われる。
- ・「高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究」というテーマにしては、研究目標・目的は狭い対象を扱っている。基礎的な電気生理学的実験に取り組むことは、内容的には問題ないが、看板と中身の整合性をとることは必要。

○チームの総合力

評 価

B

【評価内容】

- ・自律神経、生理機能の研究の進展は順調である。社会的にもインパクトのある高次機能（認知症）について更なる成果が望まれる。着実なシーズの育成が必要である。
- ・それぞれのテーマがユニークで優れた研究を実施しているし、社会への還元も期待できる。しかし、チームとしてのまとまりは充分とは言えない。特に競争が厳しい研究分野でもあるので、神経生理などのそれぞれの研究資源をより有機的に連携して、オリジナリティが高く、深みのある研究成果を達成して、さらなる社会への還元を期待する。
- ・脳神経科学という分野でまとめられているが、チームとしての一体性は感じられない。若手の研究者を育成する環境が作られていることは評価される。

4 老年病態研究チーム

○ 研究テーマ別評価

4-1 血管医学	
【研究の目的】	
○ 細胞移植医療のソースとしての多能性幹細胞（ES 細胞、iPS 細胞）や体性幹細胞（間葉系幹細胞、脂肪幹細胞など）の特性を明らかとし、その成果を臨床の場へ還元すること、特に心疾患における心筋再生治療の実現に向けた幹細胞研究を行う。	
評 価	B
【評価内容】	
・ 品質評価に関する基盤研究の内容が具体的に定義されていないので、進捗状況の判断が難しい。血管内皮細胞の細胞老化による細胞膜糖鎖の研究は全体構想の中でどのように位置づけられるのか不明である。	
・ この分野は医療及び産業分野からの要求も大きく、その基盤的研究としての研究計画の早期実現を期待する。ただ、どのようにこれらの要求に答えて行くか、判然としない点もあるかと思う。研究所として特徴のある、加齢、酸化ストレスや糖鎖等の独自の、あるいは特徴的視点を取り入れようとしていることはよく理解できる。	
・ 現在進行中の研究をベースとして、最終的な目標（新たな再生医療、疾患モデルによる心血管病の治療・予防法の開発）を達成できるとは思えない。	
・ 再生医療は発展させるべき重要な分野である。しかし、幹細胞自体に不明な点が多い状況で、果たして品質評価ができるのであろうか。どのような考え方に基づいて糖鎖に注目するのか説明が不十分である。意義のある研究にするために、研究計画の再検討が求められる。	

4-2 生活習慣病	
【研究の目的】	
○ 骨・筋疾患予防（発症予防、早期診断・治療、転倒・骨折予防）に有効なオーダーメイド医療の実現を目指す。	
評 価	B
【評価内容】	
・ 特に大腿骨骨折リスクを独自の WRN 遺伝子を加え、5 遺伝子の SNP から予測するシステムの開発は、大変興味深く有意義であり、医療・社会・産業へ還元可能な具体的研究成果と考えられる。他のテーマを含めて、社会への還元を担う中心として、推進されることを期待したい。	
・ GRS は他分野へも応用可能であり、興味深い。	
・ 高齢者における骨、筋疾患と関連する SNP 情報は予防の観点から極めて有用である。重要なプロジェクトとして期待される。	

4-3 運動器医学

【研究の目的】

- サルコペニア・筋萎縮の分子機構を解明する。
- 科学的根拠に基づく介護予防及びサルコペニアの診断法、予防・治療法の開発を目指す。
- 人口高齢化で増加する神経筋難病による筋萎縮の発症機構、診断、予防・治療法の開発を目指す。

評 価

B

【評価内容】

- ・筋萎縮に関わる重要なテーマを一貫して実施し、良い成果が出ている。
- ・重症筋無力症の各種モデルマウスの作成と解析の成果は、モデル動物の国際的ガイドライン作成への参加として評価されている。サルコペニアのバイオマーカーへの応用を、社会還元として期待する。
- ・シーズとして有望、期待される。
- ・研究の焦点が絞られていて、優れた研究成果につながる可能性がある。具体的な成果はこれからであろう。

○チームの総合力

評 価

B

【評価内容】

- ・3つのテーマともそれぞれにすぐれた研究を行っているが、テーマ間の連携は見えてこない。しかし、他部門や他施設との連携はあり、現在の体制で機能していると思われる。
- ・臨床に直結する研究が、本チームのミッションであろうが、チームによってバラツキがある点が気になる。全体的成果は良好。
- ・それぞれの研究グループが独立した、また目的がはっきりしたテーマを持ち、着実な成果をあげている。実際の医療や社会への応用も念頭においた、研究活動を行っているのは特筆すべきである。チームとしての一体感の維持が今後の課題と思われる。TOBIRAの活動や、他の研究チームや外部との連携も十分に考慮されている。

5 老年病理学研究チーム

○ 研究テーマ別評価

5-1 高齢者がん	
【研究の目的】	
○ 加齢（細胞老化）と癌を含む老年性疾患の関係を解析することにより、老化を遅延する因子（生活習慣病など）を解明する。	
評 価	A
【評価内容】	
・テロメア研究はオリジナリティが高い。テロメア短縮と高齢者の発癌との関連（前癌状態）を明らかにしており、昨年度の評価委員からの問題提起（テロメア研究の方向性）への回答が得られつつあると思われる。ただ、テロメア短縮や癌への移行のメカニズムについての説明が待たれる。テーマ間の連携も密接であるし、他のチームとの連携も良好である。	
・健康長寿臨床部門はもとより、がんセンター、がん研など国内のがん研究の基盤を成す機関との連携体制が築かれており、着実な成果が見込めるほか、これら連携機関への還元も期待できる。	
・テロメア研究など特徴的な研究が着実に進捗している。また高齢者の組織バンク形成や、病理学的解析の中心としての活躍は、高齢者研究の基盤構築に必須である。	
・前癌状態の定義など体系的な発信も行われている。	

5-2 神経病理学（高齢者ブレインバンク）	
【研究の目的】	
○ 高齢者ブレインバンクの構築を通じ、遺伝子発現研究にも使用可能な高品位リソースを蓄積し、全国の神経科学研究者と共同で研究することで、老化に関わる運動・機能障害の病因の解明に貢献する。	
○ 高齢者ブレインバンクプロジェクトを通じ、臨床診断基準の作成、治療の有効性の検討、病因の追及を行うことで、臨床への直接的な還元を試みる。	
評 価	A
【評価内容】	
・我国で最も充実した、臨床診断の確定した、また利用し易い高齢者ブレインバンク（バイオリソース）の形成と維持が行われており、大変意義があり、世界に誇れる成果と判断する。また、新たな登録数や施設の受け入れも進んでいるようである。	
・さらに充実したバンク形成のために、ネットワークの形成や生前同意登録等を実施している。また、独自の神経病理学的研究も順調に進行している。	
・高齢者ブレインバンクという貴重なリソースの構築を行い、当該研究分野に貢献をしている。海外の財団や、国内外の研究機関との共同研究を活発に行っており、引き続き成果が期待される。	

○チームの総合力

評 価	A
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・昨年と同様に、公的研究費や資金援助が充実している。特にブレインバンクは将来も維持、発展ができるように様々な機関からの援助の継続が望まれる。そのために社会や国民への周知と研究成果の社会への還元には是非努めていただきたい。高齢者がんグループは独自の研究の進捗も十分であるが、研究所の各研究チームへの支援にも重要なチームである。・臨床、研究が一体となってヒト組織を対象とした研究が行える基盤を着実に築き、成果を出している。	

6 神経画像研究チーム

○ 研究テーマ別評価

6-1 脳機能	
<p>【研究の目的と意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ アミロイドイメージングに加えて、神経伝達機能、神経可塑性、神経保護作用に着目した認知症トレーサーの新規開発・導入を行い、認知症やうつ病の病態、生理研究へ展開する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ T S P O リガンドの開発 ・ I T M M - m G l u R 1 のイメージング ・ 新規リガンドの探索・導入 ○ がん診断用トレーサーの新規開発・導入を目指す。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 4 D S T の臨床研究 ・ F - 4 D S T の開発 ・ F E S 臨床開始 ・ ステロイドリガンドの開発 	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 既存の認知症マーカーに比べての優越性を社会へアピールできると良いと思う。 ・ PET 用の新規トレーサー T S P O や、I T M M 臨床研究、アミロイドやタウのイメージングトレーサーなどの開発と利用を積極的に行っている。専用合成装置の製造施設承認など順調に進捗している。がん診断用トレーサーの新規開発も着実に進捗している。 ・ 他部門、病院部門、外部機関と連携しており、脳イメージング剤の研究開発が期待される。 ・ がんを対象として広げていくのか、テーマ設定に遡って検討した方が良い（がんの研究自体は進めるべきだが、テーマ名との矛盾、どこまで対応できるか等の体制の問題）。 	

6-2 P E T 画像診断	
<p>【研究の目的と意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 認知症の超早期診断及び発症予防を可能とする画像バイオマーカーの確立を目指す。 ○ P E T 診断技術の臨床研究への応用を目指す。 ○ アルツハイマー病克服に向けた国際研究に参画する。 	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症は我が国が最も重要とする研究分野であり、その中でも早期診断と治療戦略の開発が、喫緊の課題である。その中核となる研究テーマである J-ADNI2 の中断が残念である。アミロイド、タウに新たな診断薬を導入し、Lewy 小体病やタウオパチーの画像診断への応用が開始されている。 ・ アルツハイマー早期診断法について、更に精緻な知見が得られたものと推量する。ただし、臨床化にあたっては保険収載の問題があり、その点も加味した診断法の優先順位づけをいずれかの部署で行うことが今後求められるのではないかと。 ・ 検査の適応をしっかりと見極めていく検討も必要か？（特に認知症） 	

○チームの総合力

評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・必要な装置、人員の配置は着実に行われている。2つの研究グループが実質上一体となって研究・診断を行っていて、十分な成果が上がっている。今後ますます利用の頻度が増すと考えられるが、基礎研究のグループと、どの程度連携できるかも、研究所の画像診断チームとしての特徴を出すための課題と考える。・他部門も含めた研究所の基盤データ（画像）を支えるべく、精度管理・向上がされている点は評価できる。	

社会科学系研究外部評価委員会

1 評価対象研究

○ 研究テーマ（チーム）

研究チーム	研究テーマ
1 社会参加と地域保健	1-1 社会参加・社会貢献の促進
	1-2 老化・虚弱の一次予防と地域保健の研究
2 自立促進と介護予防	2-1 筋骨格系の老化予防の促進
	2-2 介護予防の促進
	2-3 認知症・うつ予防と介入の促進
3 福祉と生活ケア	3-1 在宅療養支援方法の開発
	3-2 要介護化の要因解明と予測
	3-3 終末期ケアのあり方の研究

○ その他の研究テーマ

研究テーマ	
4 東日本大震災被災者支援研究	
5 長期縦断研究	5-1 S O N I C (Septuagenarians, Octogenarians, Nonagenarians, Investigation with Centenarians) 研究
	5-2 虚弱 (frailty) の予防戦略の解明を目的とした研究
	5-3 高齢者の健康と自立の維持と介護予防のための新たな検診システムの開発
	5-4 都市高齢者の社会・経済・健康格差を乗り越える研究

2 評価方法

評価にあたっては、テーマについては平成26年度の研究成果、研究計画の実現の可能性及び総合評価を、チームについては総合力の視点から、5段階（5点満点）により評価を行った。また、その他の研究テーマについても、平成26年度の研究成果、研究計画の実現の可能性及び総合評価を上記と同様に行った。この総合評価点により、以下のように、AからDの4段階に評価を区分した。※自然科学系研究外部評価委員会と同じ

3 評価委員

別添「社会科学系研究外部評価委員会委員名簿」のとおり

2 外部評価委員会実施日

平成27年2月27日（金）午後1時00分～

社会科学系研究外部評価委員会 委員名簿

区 分	氏 名	所属・役職名
学識経験者	やまもと のりこ 山本 則子	(看護・健康科学) 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 教授
	あらい ひでのり 荒井 秀典	(健康科学・老年医学) 国立長寿医療研究センター 副院長
	こうざき こういち 神崎 恒一	(老年医学) 杏林大学医学部高齢医学 教授
	おさだ ひさお 長田 久雄	(老年心理学、臨床心理学、健康心理学、発達心理学) 桜美林大学大学院 老年学研究科 教授
	はが のぶひこ 芳賀 信彦	(リハビリテーション) 東京大学医学系研究科リハビリテーション医学 教授
	たみや ななこ 田宮 菜奈子	(ヘルスサービスリサーチ、高齢者・障害者の地域ケア) 筑波大学医学医療系ヘルスサービスリサーチ分野 教授
都民代表	よこた はじめ 横田 一	(報道関係) 元毎日新聞社 編集委員
行政関係者	むらた ゆか 村田 由佳	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

1 社会参加と地域保健研究チーム

○ 研究テーマ別評価

1-1 社会参加・社会貢献の促進

【研究の目的】

- 高齢者のウェルビーイング（幸福）を促進・阻害する社会的要因を解明する。
- 多世代共生社会に向けた世代間交流・ソーシャルキャピタル醸成の効果を検証する。
- 高齢者の多様なニーズに応える有償・無償の社会貢献プログラムの開発を目指す。
- 社会的孤立の予防に向けた重層的な地域包括ケアシステムの開発を目指す。

評 価

B

【評価内容】

- ・読み聞かせRCTの実施は評価できる。実施上問題はなかったかなど、共有していただきたい。社会活動は月に1回以上でどうなるのか示されるとなおよい。男性のサロン参加促進が課題。女性の孤立低下は興味深い。
- ・研究のロードマップが明らかでなく、今後の実現性について、よく理解できなかった。
- ・福祉以外の領域（就労）、高齢者同士だけでなく、多世代交流も視座に入れている点は評価する。ややもすると、「高齢者の社会参加」「地域包括ケア」とともに「高齢者だけの問題」と受け止められがち。それだけではないことを立証し、提言されることに期待する。

1-2 老化・虚弱の一次予防と地域保健の研究

【研究の目的】

- 虚弱化のプロセスを解明する。（①高齢期の虚弱化のパターンの解明、②異なるパターンの虚弱化の学際的原因解明）
- 高齢者の虚弱化を予防または先送りする社会システムの開発を目指す。
- 健康余命を延伸することの社会経済的評価を行う。
- 種々の疾患・障害と、加速度計で測定された日常身体活動との関係を詳細に調べて至適生活習慣を解明し、予防医学システムの開発を目指す。

評 価

B

【評価内容】

- ・加齢の類型化は貴重な知見。ぜひ属性との関係も見ていただきたい。死亡例が含まれていないのであれば、selection bias があること的前提は大切。入院施設入所の扱いも同様。
- ・虚弱予防のための社会システムとして二つのプロトタイプは分かりやすい。大都市近郊モデルは都内でも活用できる地域があるとのことだが「ベッドタウン」「地縁が薄い」「目的志向の集いはさかん」「交通アクセス」以外の属性も今後提示できれば、都内の多くの地域で参考になると思われる。
- ・現在の対象地域で得られた成果の他地域への普及拡大の可能性と、研究資金の獲得確保も含めて継続研究体制を維持するための努力が期待される。

○チームの総合力

評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none">・事業の連動や普及には課題も残されているが、社会参加、地域保健ともに、着実に研究が進行しており成果が上がっている。・学際的な体制をとり、メディアからの接触も増え、研究の方向性について社会的認知を受けつつあると思われる。・両テーマ間の相互補完ができていること、研究資金獲得など評価できる体制である。一方、各研究成果をどのように「高齢者の社会参加の促進」にまとめ、わかりやすく発信していくのかに期待したい。	

2 自立促進と介護予防研究チーム

○ 研究テーマ別評価

2-1 筋骨格系の老化予防の促進	
【研究の目的】	
○ Sarcopenic Obesity の予防に効果的な包括的介入プログラムの開発を目指す。	
○ 筋骨格系老化に関わる危険因子を解明する。	
評 価	A
【評価内容】	
・積極的に多くの介入研究が行われており、いずれも社会に還元される可能性のある結果を得ている。研究成果の論文報告も十分に行われている。	
・長期介入（4年）は貴重。質の高い学術誌掲載も評価できる。ダブルブラインドも根拠としては重要。倫理面には留意して進めていただきたい。	
・睡眠の質と虚弱化との関係は、うつ・閉じこもりと虚弱化との関係にも通じるものを感じる。介入方法開発にて睡眠時間だけでなく質にも寄与することを期待する。	
・サルコペニア、フレイルに対する様々な介入研究が行われており、地域、行政にも還元できる研究成果が現れている。	

2-2 介護予防の促進	
【研究の目的】	
○ 現代の高齢者の生活環境や生活スタイルの変化を考慮した新活動指標を活用し、生活機能障害を予防するためのスクリーニング法への応用について検討する。	
○ 高齢者における食と栄養の支援を口腔・運動機能を含む包括的な視点から探索し、複合提供サービスプログラムを考案し検証する。	
○ 認知症の摂食・嚥下障害およびドライマウスの背景因子を把握し、支援プログラムを考案する。	
○ 抗酸化ビタミンと身体・運動機能との関連を検討し、ビタミン関連遺伝子多型別血中ビタミン濃度と身体・運動機能との関連を明らかにする。	
評 価	B
【評価内容】	
・咀嚼機能低下のリスク要因として、現在歯数・補綴歯数よりサルコペニア重症化がより高いことなど、食生活支援に関する知見はサルコペニア・フレイルに関する他テーマの知見とともに活用が期待される。	
・重要な知見が得られているが、担当者の転出によりテーマの見直しや再編などが適切に検討されることが必要であろう。	
・オーラルフレイルという新しい概念が提示されている点は興味深いですが、内容的にはまだ端緒か？将来発展することを期待する。	

2-3 認知症・うつの予防と介入の促進

【研究の目的】

- 認知症の早期発見・早期対応システムとQOLの改善・維持を目指した地域ケアモデルを確立する。
- 高齢者の精神疾患の早期発見・早期対応システムとQOLの改善・維持を目指した地域介入プログラムを確立する。
- 災害時における高齢者のメンタルヘルス対策及び認知症支援のあり方を確立する。
- 認知症高齢者を支える地域包括ケアシステムの確立を視野に入れて、認知症のための医療サービス強化策と地域連携体制構築の戦略を提示する。
- 高齢者の難治性精神障害の病態解明と治療法開発を推進するために、病院の臨床データを継続的に蓄積し、多面的な分析を行う。

評 価

B

【評価内容】

- ・ 認知症、精神疾患の早期診断、支援システムや災害時における高齢者のメンタルヘルスと認知症支援などについて研究が行われているが、研究の新規性・妥当性についてやや疑問がある。
- ・ 多剤併用との関連重要ですが、因果関係が気になる。認知症関連薬コントロールできているとのこと。重要課題なのでぜひ詳細に分析を進められたい。
- ・ 認知症の早期診断については計画の見直しが必要と思われる。
- ・ DASCの開発普及、一般向けのチェックリスト作成、疾患センターの評価など多くの施策に知見が活かされている点を高く評価する。

○チームの総合力

評 価

B

【評価内容】

- ・ 精力的に調査をされていると評価したいが、具体的介入やその効果測定につながる取り組みがやや少ないように思われる。
- ・ 認知症と精神健康、老年症候群、老年病の二次予防に焦点を当てた研究を統合的に行うことができるチーム体制の整備は、特に重要と考えられる。
- ・ 身体とこころのコーディネートは厄介そうだが、外部への講師派遣など飛び抜けて多く、この分野に対する社会的ニーズの高さがうかがわれ、結果が待たれる。
- ・ 多職種により学際的な研究ができる体制、病院部門と密接な連携体制が築けている。また、従前からの「介護予防事業」に加え、認知症対策においても国・都など行政施策に広く活用されるなど、社会からの期待も大きい。

3 福祉と生活ケア研究チーム

○ 研究テーマ別評価

3-1 在宅療養支援方法の開発

【研究の目的】

- 高齢者の在宅療養環境を改善するため、リハビリテーション、看護技術、心理社会的支援、権利擁護、自治体の支援について研究する。

評 価

B

【評価内容】

- ・個々の知見は評価できるものの、フィールドが在宅ではなく施設・病院（例：ユマニチュード、がん終末期、看取りケア）であるなど、「在宅療養支援」に含まれるのかよくわからないテーマ設定が見られる。また、病院との連携が活発であることは評価できるが、「在宅療養支援」にどのように寄与するのかわかりにくい。
- ・来年度の計画が述べられていたが、特に施設虐待は新しい研究であり、目的と方法が適切であるか、吟味が必要と感じた。
- ・研究内容が、介護予防のための街作りについては在宅療養支援方法の開発というテーマとずれているように思われる。より研究テーマに沿って、行政、地域に還元できるような研究成果が必要と考えられる。
- ・本テーマには幾つかの課題が含まれているが、在宅療養支援という観点で相互の関連などを明確にし、テーマとして統合することを検討することが望まれる。

3-2 要介護化の要因解明と予測

【研究の目的】

- 医療や介護サービスを必要とする虚弱高齢者が、生活場所・療養場所を移動する時に生じる医療・介護上の課題について、現状把握・要因分析や先行事例の収集等を行う研究を基盤として、ケアの継続性と包括性が保証され、高齢者が安心して医療・介護を利用できるサービス提供プログラムの開発を目指す。

評 価

B

【評価内容】

- ・わが国で介護者のコホートは貴重。在宅医療のレセプト研究では制度変更や家族の力も加味できるとなおい。 (特に自己負担ゼロの影響) 多病性はよく言われている割にデータがない。可能なら受療行動含めた分析を (かかりつけ医の意義などを考察)。
- ・地域包括ケアシステム導入に関わる課題とその対応策を明らかにすることなど重要な研究目的、課題があり、それを実現、達成するための一層の着実な研究の進行が望まれる。
- ・全体として研究のインパクトに乏しい。新規性、独自性のある研究を行っていただきたい。
- ・自己負担額ゼロによる「誘発需要」(医療経済学) が確認されるのか、結果を注目したい。

3-3 終末期ケアのあり方の研究

【研究の目的】

- 良質な看取りケアが提供できる体制づくり、本人の希望に沿って終末期ケアを提供する体制づくりに関する研究を中心として、本人の終末期医療に関する意思を事前に残す取り組みなど、本人、家族、医療・福祉サービス提供者等、関係者間の合意に基づくケア実践を支える研究を推進する。

評 価

C

【評価内容】

- ・ 質的研究を行っていると思われるが、解析方法が決まっていないのは問題である。研究成果も十分とはいえない。
- ・ ライフデザインノートの研究は、昨年度からの進歩が感じられなかった。その他についても、概念的な研究であり、テーマの内容を考えても、研究計画に何らかのアイデアが欲しいと感じた。
- ・ 終末期ではない一般の高齢患者が事前伝達に至る過程（希望を記述する過程と障壁）を示した点は評価できるが、そもそも内訳となる3テーマの相互関係がわかりにくい。
- ・ 本人、家族、医療者の終末期医療に対する意識が明確に整理され、質の高い終末期ケアの在り方が解明され、普及されることが期待される。方法論的な側面も検討されたい。

○チームの総合力

評 価

B

【評価内容】

- ・ チームとしての連携が不十分である。隔週でチーム会議を開催しているとのことであるが、十分機能しているとはいえない。
- ・ 3つの研究テーマともに着実に研究が進められているが、チーム全体としての統合も考慮しつつ進めることが期待される。
- ・ 研究テーマの設定次第ではあるが、本チームの研究発表が「総説」中心になりやすい特性ではある。そのこと自体は否定しないが、研究の質を一段引き上げるためには原著論文を出すことである。「ケアの在り方」をテーマとする本チームの使命に期待しつつ、更なる改善をお願いしたい。

4 東日本大震災被災者支援研究

<p>【研究の目的】</p> <p>○ 東日本大震災によって甚大な被害を受けた東北地方太平洋沿岸地域における高齢者支援、高齢者医療・介護に関わる専門職支援を課題とし、地域再生を支援する活動を行う。 さらに、大震災の経験を首都圏での災害に生かすべく、調査研究、広報普及活動、広域支援組織作りなどを実施して、今後に向けて準備を行っていく。</p> <p>【支援内容】</p> <p>○ 福祉サービス復旧を担う専門職及びサポートセンター支援を目的とした通年の包括的な研究講座の実施</p> <p>○ 住民を主体とし自主グループ化を目指す介護予防体操普及サポーター養成講座の開催</p> <p>○ 仮設住宅に居住する高齢者を対象とした介護予防講座の実施</p> <p>○ 首都圏防災に資する調査及び普及活動の実施</p> <p>【支援対象地域】</p> <p>○ 宮城県気仙沼市・石巻市、福島県相馬市、岩手県陸前高田市など</p>	
評 価	B
<p>【評価内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在宅医療の評価が重要である。在宅死の数字は在宅ケアの成功として捉えてよいものか、捉えておられるのか質が気になる。 ・今後の方向と課題が述べられていたが、年単位のプロジェクトの進め方が分かりにくい。 ・JRSは在宅医療の新モデルを示しうる可能性をはらんでおり、頼もしい。 ・気仙沼市の在宅医療の現状調査は、災害により医療資源がどのように変容し（せず）、医療体制や受療行動を変えたのか（変わらないのか）、どのような結果が得られるのか注目したい。 ・震災後4年が経過し、支援ニーズにも変化があるのではと考える。他国、多組織の参考になるデータや効果的なプログラムをぜひお願いしたい。 	

5 長期縦断研究

5-1 SONIC (Septuagenarians, Octogenarians, Nonagenarians, Investigation with Centenarians)研究【23～32年度】	
【研究の目的】	
○ 前期高齢者から100歳以上高齢者までの高齢期全体の集団を対象とした身体・生理機能、認知機能、感情状態、心理的 well-being の経年変化と関連要因に関する総合的・包括的検討を行う。	
評 価	B
【評価内容】	
<ul style="list-style-type: none"> ・70歳群、80歳群、90歳群について認知機能とその医学的・心理社会的関連要因や、70歳群を対象として口腔機能、80歳群、90歳群を対象として精神的健康や幸福感についての研究成果が得られており、順調な進捗と考えられる。 ・吻合力と摂取食物との関連、口腔関連QOLと性格特性との関連、職業経験と高齢期の認知機能との関連など、大規模な縦断研究ならではの知見が評価できる。また、性格特性について心理が参加するなど多側面からのアプローチも良い。 ・他の長期コホート研究との差がわかる調査にしていってほしい。知見の新規性にやや疑問が残る。 	

5-2 虚弱 (frailty) の予防戦術の解明を目的とした研究【23～32年度】	
【研究の目的】	
○ 高齢者が要介護化するパターンは「early onset disability」と「Late onset disability」の二つに大別される。本研究では、「Late onset disability」の背景として極めて重要な「虚弱 (frailty)」に着目し、虚弱の成因と予後を解明するとともに、介入研究により複合的な改善プログラムを開発し、もって「Late onset disability」の予防に向けた有効な戦術を立てていく。	
評 価	B
【評価内容】	
<ul style="list-style-type: none"> ・「健康づくり応援手帳」など身近なところで還元されている。虚弱診断基準は注目されるだろう。 ・基礎データとして有効活用され、幅広く還元される調査と思われる。また、日本人高齢者の体組成標準値は、応用範囲が広いと思われる。 ・高齢者（超高齢者を含む）の基本属性を示す重要な研究と考える。 ・長期コホートの維持は重要だが、似たような調査が多く、短期的にテーマを決めて併走させるなど工夫ができないかと思う。 	

5-3 高齢者の健康と自立の維持と要介護予防のための新たな検診システムの開発

【23～32年度】

【研究の目的】

- 高齢期、特に後期高齢期における健康と自立の維持を目的とし、老年症候群を予防するための新たな検診システムを開発する。
- 本研究によってスクリーニングされたハイリスク高齢者に対して、その後の運動、栄養などの介入プログラムを効果的に運用するための新たな検診システムの有効性について検証する。

評 価

B

【評価内容】

- ・板橋コホートにおいて、フレイルと味覚・嗅覚・咀嚼機能の関係を明らかにしており、研究は順調に進展していると評価できる。
- ・適切なコホートを用い、多方面から適切な研究が行われていた。「検診システムの開発」への結びつきが、現時点では不十分と感じられた。
- ・旧老人研時代の「中年からの老化予防」に続くデータは、国の介護予防制度（現二次予防高齢者抽出など）にも活用されており、今期においても基礎データとして有意である。
- ・新たなデータ項目の検討だけでなく、IT時代を反映した新たな検診方法などを期待していた。

5-4 都市高齢者の社会・経済・健康格差を乗り越える研究【23～32年度】

【研究の目的】

- 都市高齢者の社会、経済の変化と、それに伴う健康格差を長期縦断研究によって明らかにし、その対応を提言していく。なかでも、追跡調査で脱落してしまう者に着目し、訪問調査によって転機を追跡するとともに、自治体と連携をとりながら、その救済策を模索する。

評 価

B

【評価内容】

- ・駅の利用や身だしなみと社会参加との関連について研究が行われているが、新規性に乏しいと思われる。
- ・鉄道の研究はユニークだが、健康のために利用しない人もいるので一元評価できるかやや疑問。路面電車、バスとの比較（自転車と一緒にいる）アンケートでは。
- ・社会・経済・健康格差を乗り越えるために、どのような方略が必要なのか、そのような視点が欠けているように思われる。
- ・貴重なフィールドを積極的に活かし、都市高齢者が格差無く、質の高い生活を送る条件の解明が期待される。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会設置要綱

制定 平成 22 年 12 月 24 日 22 健事第 1174 号

改正 平成 25 年 10 月 1 日 25 健事第 1259 号

(設置目的)

第 1 条 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所（以下「研究所」という。）が実施する研究について、厳正な評価を行い、もって、より効率的・効果的な研究活動を推進し、都民である高齢者のための健康維持や老化・老年病予防に寄与する研究体制づくりに資することを目的として、研究所外部評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第 2 条 委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 研究所で行われるテーマ研究、長期縦断等研究の評価（このうち、チーム研究については総合力の評価）を行うこと。
- (2) 前号の研究評価を実施した後、速やかに、評価結果及びその概要をとりまとめ、必要な意見を付して、センター長及び研究推進会議に報告すること。
- (3) その他、センター長が必要と認める事項

(組織及び開催)

第 3 条 委員会は、次の各号に定める委員会（以下「各委員会」という。）によって組織される。

- (1) 自然科学系研究外部評価委員会
 - (2) 社会科学系研究外部評価委員会
- 2 各委員会に委員長を置く。委員長は委員の互選により選出する。
 - 3 委員長は、各委員会を招集し議長を務める。
 - 4 各委員会は、委員の過半数の出席により成立する。
 - 5 委員長に事故がある時は、あらかじめ委員長が指名した委員が委員長の職務を代行する。

(構成)

第 4 条 各委員会は、次の各号に掲げる評価委員（以下、「委員」という。） 8 名以内をもって構成し、委員はセンター長が委嘱する。

- (1) 学識経験者 6 名以内
 - (2) 一般都民を代表する有識者 1 名
 - (3) 行政関係者 1 名
- 2 委員長は、必要と認めるときは関係者に各委員会への出席を求めることができる。
 - 3 委員長は、必要と認めるときに部会を設けることができる。部会長は委員の中から

委員長が指名するものとする。

(委員の任期)

第5条 委員の任期は、就任の日から5年間とし、再任することを妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残存期間とする。

(評 価)

第6条 第2条(1)に定める評価は、評価実施時期に応じて下表のとおり実施する。

評価実施時期	評価の種類	評価の活用
中期計画期間前年度	事前評価	センター長が研究計画について決定する際に活用
中期計画期間初年度から最終年度の前年度まで	中間評価	センター長が研究計画の継続等について決定する際に活用
中期計画期間最終年度	最終評価	センター長が研究計画の継続等について決定する際に活用

(公 開)

第7条 各委員会の会議は公開する。ただし、委員長あるいは委員の発議により、出席委員の過半数で決議したときは、会議を公開しないことができる。

2 会議を公開するときは、委員長は、必要な条件を付することができる。

(評価結果の公表及び開示)

第8条 センター長は、評価結果の概要を公表する。

2 センター長は、研究チーム、研究テーマ又は長期縦断等研究の代表者から求めがあった場合、研究チーム、研究テーマ又は長期縦断等研究の代表者に、当該研究チーム、研究テーマ又は長期縦断等研究に係る評価結果を開示することができる。ただし、委員会で決議のあった事項については、開示しないことができる。

(庶 務)

第9条 委員会の庶務は、経営企画局事業推進課において処理する。

(雑 則)

第10条 この要綱に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項はセンター長が定める。また、委員会の運営に必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成22年12月24日から施行する。

附 則

この要綱は、平成25年10月1日から施行する。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会実施要領

制定 平成 22 年 12 月 24 日 22 健事第 1175 号

改正 平成 25 年 10 月 1 日 25 健事第 1260 号

(目的)

第 1 この要領は、東京都健康長寿医療センター研究所（以下、「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）設置要綱の規定に基づき、研究の外部評価の実施について必要な事項を定めることを目的とする。

(評価の対象)

第 2 研究評価は、研究所で行われるテーマ研究、長期縦断等研究（このうち、チーム研究については総合力）を対象とする。

(評価の実施)

第 3 研究評価は、原則として、毎年度実施するものとする。

(評価委員及び評価の方法等)

第 4 研究評価は、次の方法により行う。

- 2 評価は、外部評価委員会の委員により、研究報告書等により行う。
- 3 評価の実施にあたり、外部評価委員会は研究に関するプレゼンテーションをチーム及びテマリーダー等に行わせることができる。
- 4 委員会の開催にあたっては、別に設置された研究所内部評価委員会も併せて行うこととする。
- 5 委員長は、外部評価委員会に研究所内部評価委員会の委員を出席させることができる。

(評価基準)

第 5 研究評価の評価基準は、5 段階評価とする。

(評価項目・評価視点)

第 6 研究評価の評価項目・評価視点は、評価の時期毎に下表のとおりとする。

	項目	視点
事前評価	行政・都民ニーズに対する有用性・必要性	有用な行政・都民還元が期待できるか、行政・都民ニーズの緊急性は高いか
	学術的な独創性・新規性	学術的な見地から研究計画に独創性・新規性が認められるか、国内外における研究の水準としてはどうか
	研究計画の実施体制の妥当性	研究計画に対して、構成・規模・他部門等との連携体制等実施体制は妥当

		か、倫理性は担保されているか、費用対効果のバランスは妥当か
	研究計画の実現の可能性	研究期間内に研究目的を実現させるために妥当な研究計画となっているか
	総合評価	
中間評価	当該年度の研究成果	進捗状況はどうか、学術的な見地から新しい知見は得られたか、他部門と連携して効果的に研究が推進されているか、行政・地域・産業・学会等に還元可能な具体的な研究成果が出ているか
	研究計画実現の可能性	研究期間内に目的を実現するために妥当な進行になっているか
	総合評価	
最終評価	研究計画期間における研究成果	研究計画における目標を達成したか、学術的な見地から新しい知見が得られたか、他部門との連携は効果的であったか、費用対効果のバランスは妥当であったか
	研究計画期間における研究成果の普及・還元	特許等への活用があったか、行政・地域・産業・学会等へ積極的に成果の普及・還元を行ったか
	研究の継続性	研究継続の必要性・妥当性、研究継続の課題・方向性
	総合評価	

(評価結果の活用)

第7 センター長は、研究評価の結果を評価の時期毎に、次により活用する。

- 1 事前評価は、①研究計画・体制等の設定、②研究資源の配分とする。
- 2 中間評価は、①研究計画・体制等の見直し、②研究資源の配分とする。
- 3 最終評価は、①研究計画・体制等の見直し、②次期計画への継続の有無の決定とする。

(雑 則)

第8 この要領に定めるもののほか、外部評価の実施に必要な事項は、研究推進会議の議を経て、センター長が定める。

附 則

この要領は、平成22年12月24日から施行する。

附 則

この要領は、平成25年10月1日から施行する。

